氏　　名	川　村　比　呂　志
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博甲第 3793　号
学位授与の日付	平成２１年３月２５日
学位授与の要件	医歯学総合研究科病態制御科学専攻 （学位規則第４条第１項該当）
学位論文題目	Changes in escape rhythms several years after radiofrequency ablation of the atrioventricular junction combined with pacemaker implantation （ペースメーカ植込み術、房室結節切断術後の心室補充調律の経年変化）
論文審査委員	教授　佐野 俊二　教授　光延 文裕　准教授　草野 研吾

学位論文内容の要旨

補充収縮はペースメーカ機能異常による危険性から身を守るという点で重要な役割を果たすと考えられており、薬剤抵抗性上室性頻脈がありペースメーカ植込み術とカテーテルアブレーションによる房室結節切断術を施行した32症例につき補充収縮の出現を検討した

治療を施行してから2.6±1.9年後にペーシングレートを減少させる方法で補充収縮を分析した。最初の検討では、21症例に補充収縮を認めた。引き続きの2回目の検討では、追跡可能であった28例のうち22例名に補充収縮を認めた。最初の検討時には補充収縮がなかった10例のうち5例に補充収縮を認めるようになっていたが、最初補充収縮があった18例のうち1例は補充収縮が消失していた。

今回の検討では補充収縮の出現はカテーテルアブレーションによる房室結節切断術後、数年で増加するという結果であったが補充収縮が消失した症例もあり、ペースメーカ不全に伴う危険性を評価する上で補充収縮の検討は必要であると考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究は、薬剤抵抗性上室性頻脈に対し、カテーテルアブレーションによる房室結節切断術を施行した患者における補充収縮の出現を検討したretrospectiveな報告である。

32症例につき、術後平均2.6±1.9年に補充収縮の出現を検討したが、21症例に補充収縮を認めた。2回目の検討では28症例中22例に補充収縮を認めたが、1例で補充収縮が消失していた。補充収縮の評価を行うことがペースメーカー機能不全による危険性を評価するうえで重要であることを示唆した重要な報告である。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。